

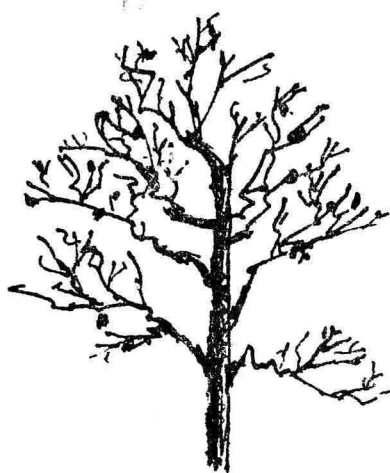
晚秋

丹羽文雄



晚 秋

丹羽文雄



三笠書房

晩 秋

定 価 七九〇円

一九七四年十二月三十日第一刷発行
一九七五年八月五日第七刷発行

著 者 丹羽文雄

発行者 竹内 肇

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五

電話東京二〇三局七七八一代表

振替東京三一三二〇九六

郵便番号一六二

落丁・乱丁は本社またはお求めの書店でお取替えます。須藤印刷・宮田製本

©Fumio Niwa Printed in Japan, 1974

0093-001077-8937

晚 秋

目 次

隣は何をする人ぞ……………	九
落葉……………	五
ぬすみぎき……………	二〇
お惣菜の味……………	二七
出世の謎……………	三三
見染められて……………	四〇
妻という職業……………	四七
女と母……………	五三
式……………	六〇
ある日の会話……………	六六
結婚について……………	七三
復讐の意味……………	七九
妻の日……………	八五
義父……………	九一
不貞の匂い……………	九七

女の執念	一〇三
贈物	一〇
ある日の車中で	二六
薬	三三
不可抗力	三八
白い雲	三四
動揺	四〇
矛盾の果て	四四
貞操の意味	五三
母とお茶漬	五九
快活	六四
電話	七〇
帯子の設計	七六
きもの	八三
ホテルに出向く	八八

肉体の論理	一九四
水のない海	二〇〇
夏の大島	二〇六
ちんぽうしや	
闖入者	二一三
椿の花ののれん	二一八
姉妹	二二四
再婚の話	二三〇
石段の途中で	二三六
わかれ	二四三
他人ということ	二四八
新生活	二五四
母の告白	二六〇
続 母の告白	二六六
自己中心に	二七三
仕事を持つ妻	二七九

日日是好日	二六五
邂逅	二六一
男と女の場合	二九七
朝明むつ子	三〇三
良人の苦情 クレーム	三〇九
桑野の電話	三二五
いこじな女	三三一
バラの秘密	三三七
その夜	三四四
青山葬儀所	三四二
周囲の雑音	三四七
支笏湖 しこつこ	三五三
湖畔の再会	三六九
暖炉の会話	三六五
火は燃えている	三七二

幾
頓
武
笠
丹

晚

秋

隣は何をする人ぞ

隣家の犬が鳴いた。毎朝その時間になると、鳴いた。空腹をうったえるのか、檻から出せというのか、きまってその時間になると鳴いた。犬の声で、北畠啓は目をさました。鳴き声は、急迫をつげる調子ではなかった。鳴けば必ず人間が答えてくれるので、それをあてにしている声であつた。

犬の声で、北畠の一日がはじまる。

寒くなると、床からはなれにくくなる。床の中で時間の足を感じていると、塀の外をものすごい勢いで走り抜けるものがあつた。犬の鳴き声はしない。樹のあいだを気が狂つたように駆け抜けるのは、犬である。一米高さの金網の檻から放されると、犬は火がついたように駆け出した。三千坪はあるだろう邸の中を弾丸のように疾走した。うめきながら犬は、灌木や畑の中を駆けた。柴犬である。生れてから一年は経っていないであろう。啓は何匹か柴犬を見ている。隣家の柴犬は、燃えるような強い赤褐色であつた。

白茶けた色ではない。おなじ色でも濃淡がつよく、背のあたりは黒いくらいであつた。檻をはなれたると、犬には野生が戻るのか、邸中を駆けまわることで、それを試しているようであつた。犬に關してはあまり知識がないが、純粹の柴犬であることがわかる。精悍な、美しい形をしていた。おそらく血統書のついている犬であろう。

啓は、犬の種類のききわけるようになった。急迫をつげる鳴き方、あまえる鳴き方、おどかすための鳴き方、要求をうったえる鳴き方と、いろいろあつた。毎朝この声で目をさまされるのだが、啓は犬にはらをたてなかつた。犬が鳴かなくとも、啓の目ざめは早い方であつた。いつも家の中では、いちばん早かつた。それは、軍隊生活の名残りであつた。

あるとき啓は窓をあけ、邸中を狂つたように疾走をつづける柴犬をながめていた。方向をかえるとき、勢いあまつてそこらの苔や畑を踏みあらした。庭苔がひっつかれたように裏返り、たかが柴犬のしわざとも思われないほどの大きな傷跡になつた。畑のやわらかい土は、大の大人が踏みあらしたようであつた。柴犬はもともと獵犬だったにちがいない。起伏のはげしい山野を駆けめぐるように生れつい

ている。檻の中で、よくとび上っていた。一米高さの柵をいまにもとび越しそうにはね上った。からだの半分は網から出た。家人にはよくとびついていて、柴犬は親密の情を、先ずとびかかることによって表現するらしかった。

むやみと他人の邸の中をながめるのは、気がひけることである。が、窓から隣家をながめる場合、わが家から公園の一部をながめるような気持であった。ひろい邸には、ほとんど人影がなかった。樹木が多かった。しかも隣家とは万年塀が境になっていて、塀に添ってかなり太い檻の木が茂っていた。檻の並木のようにであった。この樹のところまでは手入れがされないもので、自然のままに茂っていた。それが目かくしとなった。先方は目ざわりな隣家を檻の木がかくしてくれると思っているだろうが、啓の側からすれば、のぞいているのを防いでくれるので都合がよい。

「隣はいいたい、何をしてるひとだろうか」
朝の食卓で、啓は妻の雅子にいった。

「何をしてるかって、お隣ではべつに商売はしてないでしょう」

「そういう調査は」と、啓は息子の信邦に視線を向けた。
「職業柄、隣家は何者か、すぐわかるだろう」

二十四歳の信邦は、有名な化粧品メーカーのセールスマンであった。

「うちの近所だけは、お客にしたくない。客となれば、必要以上にペコペコしなければならぬから、それが嫌だ。うちにいるときぐらいは、商売をはなれていたいのだ」

と、笑って答えた。

啓も苦笑で、うなずいた。信邦が優秀なセールスマンとして囑望されているのを思い出した。

「いずれにしろ、よほどの金持らしい。ペンツの自家用車もある。が、毎日会社に出勤するようすもない」

「その内にわかるわ」

北畠一家がここに引越して来たのは一ヶ月前であった。妻が隣家の広大な屋敷に気を悪くしているのは、啓にわかっていて、男以上に興味をもちそうなことだったが、妻はことさら隣家を黙殺しているようであった。妻は隣所のひとつとも親しくしようとはしない。鳴りを鎮めているふうである。あくまで現在の生活は、仮の住居である。自分らはこのような家に住む人間ではないと思っているのだ。

このような家といっても、階上は二日間、階下に三間あった。せまいが、一応庭もついていた。その庭が隣家の檻の木で、一日太陽が遮断された。それも雅子の気にいらなかった。このような家を買った啓に、妻はたえずはらをたてていた。近ごろ肥り出してきた妻の顔をながめて、

「それにしても、隣家には何人のひとがいるのか、はっきりわからない。畑仕事をやったり、庭を掃いたり、夜警をしたりしている爺や夫婦のいることはわかるが」

「隅の小さい家ですか」

邸の隅に、小さい、粗末な家があった。どこかにあったものを、そっくり移したような建物である。樹木にさえぎられていたので、母屋の建物を傷つけるものにはならないらしい。

隣家の日本家屋は総二階であった。それだけでも建坪二百坪に近いであろう。ほかに洋館があった。戦後の建物のようにでなく、蕎麦の生え工合からみても相当の年月を思わせる。車庫の一ト棟は、新しいモルタル塗りであった。そのほかに、農家の納屋を思わせるような建物があった。二階建の母屋のまわりは、凝った庭になっていた。啓は一度隣家を正面からみたいと思っているが、駅からの道がちょうど隣家の反対側になっているので、わざわざ遠まわりするほどの気にはならなかった。

あるとき、啓は柴犬のあまえた鳴き声をきいて、窓のそばに立った。納屋に近い犬の檻の前に若い女が立っていた。すなおに髪を束ねた、白いセーターをきた長身であった。遠くて、顔がよくわからなかった。若い女が檻の戸をあけた。犬がとびかかった。それをあやしながら何かいって

るが、声が届かなかった。啓はひどく清楚な感じをうけた。犬はよほどなついているらしい。犬は可愛がってくれる人間と、その家の主人をいちはやく見分ける動物といわれるが、若い女が主人公であろうとは思われない。

また、あるとき犬が鳴いていたので、啓が窓際に立った。二歳ぐらいの女の子を抱いた赤いセーターの女が、檻のそばに立っていた。啓は、犬の鳴き方の相違を感じた。母と子のようにであった。母親は小柄で、児を抱いているからだつきは、三十前後の見当であった。このひとも、家族の一員のようであった。女の児は、犬がとびあがると母親の肩に顔を伏せた。檻の高さを越して、すぐそこまで犬の顔がとび上るからである。こわがりながらも児は見たがった。犬は、白いセーターの若い女に対するようなあまえた鳴き方をしなかった。その母親は、犬を可愛がらないのだらう。

二ヶ月が経って、啓は隣家の家族をひととおりながめることが出来た。隣家の主人は、がっちりとした骨組みで、大柄であった。秋元家という、この土地の大地主であることがわかった。犬は主人をよく知っていた。当主が檻に近付くと、犬の鳴き声が卑屈になった。秋元彦太郎はあぶらぎった、大きな顔をしていた。啓は遠目で六十代と見当をつけたが、七十歳であった。

「女の児のいる、三十歳ぐらいのお母さんがいるのだが、隣家には中年の男がいない。女の児の父親はだれか。出戻りだろうか」

と、啓は妻に訊いた。

「五十ぐらいの奥さんがいるでしょう」と、妻が別のことをいった。

「ああ、そのひとは見かけているよ。秋元家の奥さんだろ」

「ところが、ほんとうの奥さんは病気で、もう何年も隣にはいないんだって。何でも湘南で療養中だってきいたわ」

「秋元彦太郎氏の本妻だね。すると、あの背の高い奥さんふうの女性、何ものか」

「奥さんですって」

からかわれていると思い、啓が笑った。

「それじゃ奥さんが二人もいることになるではないか」

「二人どころか、三人もいるわ」

「三人？」

「小さい女の児は、秋元彦太郎のいちばん新しい子供ですって」と、妻はことさら興味がないようにいった。

「おとなしそうな若い娘がいる。その妹らしい娘も見かけた。そして、その下らしい男の子もいる。四人は姉弟で

はなかったのか」

啓は、自分らとはまったく生活感覚のちがう異邦人が隣家に住んでいるような気がした。

「小柄の若い奥さんとその子は、洋館に住んでいるわ」

そこまで妻は興味のあることを知っていたいながら、夫婦の間話には持ち出さなかった。それが雅子の性格であった。

「すると、二人の娘と男の子は、母屋の方に住んでいるのだね。そして、かれらは親子なんだね。やはり秋元彦太郎氏の子供かしら」

「子供の籍は、ちゃんといっているんだって」

「しかし、本妻がある以上、奥さんは入籍出来ないだろう」

「あれほど大きな屋敷の中では、どんなことが行われているか、世間にはわからないわ。近所つき合いもしないでしょう。私ははじめから怪しい家だと思つたわ。何となく秘密のある家って感じだったわ」

「五十年配の男がいるが、あれは秘書だろうか」

啓の興味は、そそられた。

「すると、あの二人の娘と男の子のいる母親は、若い母親に対して、本妻らしい態度に出るわけにいかないね」

「自分が本妻を追出したんだもの、大きな顔は出来ないでしょう。秋元彦太郎って、区会議員にも都会議員にも

出たことがあるんですって。いまはそういうことから一切手を引いているけど、そういうときの会合には、五十年配の奥さんを正妻だといってつれて歩いたっていうわ」

「そのころ本妻は病気で、あの家にはいなかったのだね」

「一時は妻妾が同居していたというわ」

「そしていまは、妾が二人か」

「子供が三人いる方は、自分が本妻のつもりなんですよ」

「妾同士の争いはおこらないのかしら」

「どんなことがおこっても、あんなにひろいお邸では叫び声ひとつ外にもれないわ」

「若い娘が女の児を抱いていたよ」

「姉妹ですもの」

「なるほどね。そんなものかしら。父親がおなじだから、姉妹ということになる。母親同士の闘いには、娘たちは無干渉なのかも知れないね」

「秋元家には、独特の家風があるんでしょうよ。世間がよけいなおせっかいをやいたって、あの大きな、奥まった家の中ではひびいていかないわ」

「食事もしゃだろうか」

「若い母親とその子は、洋館よ」

「当主が両方に、通うのか」

「ほとんど洋館ですって」

それをどんな気持で五十年配の方がながめているか。秋元家の本妻には、子供がなかった。いずれは正昭という男の子が後継者となるのだ。そのときまで、五十年配の母親は、がまんをするというのか。ひとごとながら、啓は氣になる。それにしても、娘たちは何を思っているのか。反撥をしないのか。絶望を感じないのか。厭世的にならないのか。秋元家の人間の構成を知ってから、隣家をながめる啓の気持は複雑になった。

「妻妾同居って、第一男の立場としてやり切れないだらうね。隣家は、妾二人だが、秋元彦太郎氏はいったいどんな気持でいるのか、それが知りたいよ」

「生活のためですよ」

「生活？」

「秋元家をとび出せば、贅沢な生活は出来ない。それがこわいのよ。世間体や女らしい感情よりも、生活の方がこわいからよ。嘘かほんとうか知らないけど、病氣療養中の本妻が、いまもって戸籍を抜かないのは、生活のためだっていうわ。あいだに立つひとがあつて、何回も離婚という話になったのに、本妻が承知しないんですって。彦太郎氏の方では十分慰藉料を出すというのに、どうしても承知し

ないの。慰藉料には税金はかからないですってね。でも、そんな一時金をいくらもらったって、これから先、何年生きのびるか知れないのに、すっかり手を切られるよりは、月々仕送りをうけていた方が安心だっていうのよ」

「復讐^{ふしゅう}かも知れないね」

「妻の籍を抜かないことが？」

「生活の不安もあるだろうが、自分が籍を抜かないかぎり、いく人子供を生もうと、本妻にはなれない。妾が何人出来ようと、本妻の自分には抵抗が出来ないという強味がある。女らしい復讐だ」

「そうね、そういうこともあるかも知れないわ。辛いのは、五十年配の方ね、泰子^{やすこ}さんときいたわ。若い妾は、房子^{ふみ}さんというのよ。房子さんにとっては、泰子さんも自分とおなじ二号ではないかというので、気が楽かも知れないわ」

「いつまで経っても本妻がまわって来ないというので、妾ふたりは、ふつりその問題を脇にのけているのかも知れないね。そうでなければ、隣家は平和を保てない」

「世間から何といわれようと、あんな家におさまって、贅沢にくらせていけるのなら、仕合せよ」

啓は、ことばにつまった。疑うように妻をみた。

「女は順応性につよいものよ。あの妾ふたりは、私たち

がひとのことでやきもきするほど、自分らのことは考えていないと思うわ。若い妾は、看護婦上りよ。五十女は、もと旅館の女中だったというわ。大した出世だわ」

「それをみとめるのか」

「みとめるからこそ、あの女たちは、自家用車をのりまわしてるのよ。羨^{うらやま}しいわ」

カメラの阿克セサリーを製造販売していた北晶啓の事業は、失敗をした。従業員百五十名の会社は、倒産した。目の家の家は銀行にとりあげられ、世間の目をのがれるようにこの家に移った。阿克セサリーの会社は、妻の父親が創ったものであった。妻に対して、啓は二重に頭が上らなかつた。

「泰子というひとの立場を、羨^{うらやま}しいと思うのか」

妻は、啓の眸^{ひとみ}をつよくみて、

「羨^{うらやま}しいわ。それが女の本心よ」

二重顎^{ふたご}となり、妻の目が細くなっていた。妻はとめどもなく肥^ふっていくようであった。はだかになると、昆虫の腹を思わせた。妻は娘のころからやっていた日本舞踊をいまもつづけていた。名取であった。